

『椿說弓張用』殘編四





鎮西八郎 椿說弓張月殘編 卷之四

東都 曲亭主人編次

情入を刎て紀平治隱匿を懲そ  
頭髻と剪て舜天丸孝順を全そ

第六十四回

汝よ生て汝よ死れ因果の理り今こゝも阿公が懺悔によりて王女へばじやて  
王子のうへを奉詳ふアタリハ或る驚た或る歎たかひしきやう。翁の  
王女をすみあひて毛國持ぐ子なきんえ。庶莫被國異う先祖ハ  
天孫氏十八世玻瓈王より出られ。金枝玉葉と称せられ。國家ふはくへと  
棟梁のほよ付せ。その由緒あり。先玉ホ男児まへはまねハ。同姓の児代  
養ひて位を讓りまでも。その水原の謁をサアト。一旦世代誣君を  
欺く。王子と稱セ。罪をあつとも存命して。ふあづん。亦せんそ人もある。

も。善惡もあくね。禪子を。只一刀ふ刺殺せ。只顧先非を後悔して。  
始終をつとめまされ。阿公が恨み。怨恨をかきしむ。きのふまでも。もろに  
までも。つとめがきと。かりひけれ。今さら外のあづれ。あくび。主従とも  
いひながら。毛國野親子。みへつて身ようけ恩多う。その忠孝ふ栄めても。  
翁を助ひきせん。ひと痛しきるも。とうら漣酒も。鶴龜も  
瞼を押拭ひ。母新垣が壯も。そぞ。齡四十にちうして。有才も。公よも。そ  
隕陽師ふりせりへば。出生の子ハ男也。ひと貴う。あぐれど。年ハ十ふ  
満じて。横死をぐたりのとて。その掌を指す。説示されて。いつまでも。  
翁もかくれど。父も絶て告ぎり。と母の末期のぬうり。只假初ふ笑  
ひして。そんさせ博士が虚言。あくふ苗め。といひ慰め。一  
ハ年。のむ。ちひあらと。ト並の。ひと誣がう。推子。見とうへあらざ  
る。

贈りしも。連る枝の誠をゆふ。龜を。入懼り。も。遂ふ。その死を救ひよ  
て。漣酒も。面敷も。目ふくろゆ。とかん口観外へ。も。袖の両うだみ  
ゆき。と。卿。あそ。爲朝頻ふ嗟嘆。て幼稚の。智慧の聖罪を。糺す。ふゆき。  
はし。只阿公が奸曲を。その罪放。が。とり。も。賞。と。べた。ゆうに。にも  
あく。故の。うと。なれば。彼。その孫を王子と。縁。南風原の城。と。龜りて。  
りて。曇雲逆意。と振ふ。とり。も。竟。山南。と。龜。今。小天孫氏の後。ゆく。と  
六年。六。間。山南者。と。も。や。られ。こそ。民。今。小天孫氏の後。ゆく。と。も。  
又。爲朝。う。身に。うり。て。當初。阿公が紀平治。地図。と。贈り。こと。く。べ。縦  
えふ。おき。君父の命。かり。す。も。輒く。こ。ふ。潛ひ。す。て。鷹。を。捕獲。て。ゆく。や。その功  
ニ。つ。より。て。阿公が亡骸。を。鷹。龜。ホ。ゆ。ひ。と。べ。けれ。幼稚。を。オ。ガ。屍。と。も。よ  
く。あ。お。と。と。跡。吊。じ。と。叮。喧。ふ。説。諭。一。ま。ハ。鷹。龜。ハ。容。と。ゆ。く。も。そ  
葬。り。て。跡。吊。じ。と。叮。喧。ふ。説。諭。一。ま。ハ。鷹。龜。ハ。容。と。ゆ。く。も。そ

深に恩惠よ情ありむるかとされど某同胞へ祖母阿公よ傷し。されば  
律よ考ればその罪脱きにしは免を蒙りて腹うち切らんがとなりしも果を  
ゆゑび自殺せんとを教を舜天を急ふ推禁ひも迷つるう鶴龜汝達の  
もじ免阿公を外祖母ゆりとへ絶てあくば。あくば故ふこれよ傷く。あり  
則孝子なり。かくてその祖母ゆりあがむ至りてみづら罪ふ死んと。是  
れ順孫ゆり。かれハ罪ゆり似て罪みとりども。あくふ道理とつまざん。  
可惜玉よ瑋あるが如きん。あられべ目今同胞の頭髪ヒ剪てその死よ代み  
孫よ撃れんと庶幾ト。阿公が死も拘死ならず。孝子順孫の志も強て奪ふ  
み至るべくして刑罰と刃ヒ抜て鷹龜う髪ヒと忽地弗と剪刀捨てゆへ  
えりやおも為朝親子の仁慈ふ感涙禁ゆべ。附こよがらふすの孫ヒ  
赦ひよとれ紀平治が被ひますふあくられて今と限りの阿公へおほ  
おひふ嘗ヒ合ひ。彼首足首ヒ伏侍し。若痛さこそ。と八町礎が臨終  
もくそて肉を刃ふ頭をうち落せば。是え期へあても今さうふ。こうう  
の間ふ夜の鶴細輪の田井ふ鳴く龜も其火燒うるひゆり洁處  
み阿公が麾下の野伏東紀南吉堤造紅衛木の數十人古廟の背  
より立生て。とみ地上ふ拜伏し。某木ふえ来名りた。劔武者みへりへ  
も。曩裏ふ大将軍に従ひより。長川の敗軍よ卒ドて必死ヒ脱れ方  
りのどもあり。大將軍曰夫婦のうへひまく。軍師先鋒の両将も  
討死一まひぬ。と笑ふ。この城山へ脱れ入り。こうすにも阿公が王子を  
ちる冊にて鬪鏤樹谷ふ隠れをす。名告ひ。王子ふ後ひをまりしが。  
口を諭ふ。よはしなくて。山客野伏ともありてゆしき。あくまふ。今。山の尾  
崎よりゆり来て。阿公が今般の懲悔物をうりと竊使して。じめ王予へ

尚寧王の皇子なるずされよしを覺り。且大將軍王女りうども。至心さく  
まことと眼前見えぬるふ天の明るゆうにかがえり。ひと歎くゆ。  
むちくまうせしうべ。為朝ひうくふその名を聞く。波ホナセれりの  
うとばす。先鋒の大將鶴龜をもとざることやあれ。あくふそな夥計  
なる。宜壽。平西朝安桀とやうんの三人。甲夜よ齋と生拘すて。阿公が  
りゆ任し。首を刎へとあらじへいゆ。よ。ま。山林よ脱き。王子ふ後ひて。國の男も忠義を盡そむへ似を言ふと  
ぬく。山林よ脱き。王子ふ後ひて。國の男も忠義を盡そむへ似を言ふと  
行ひと齟齬それば。もの疑ひあり。どうひき。と宣へば。も承りうともふ  
頭ひ撓。仰御りにゆく。件の三人ハ故朋輩にゆく。軍師陶松壽の  
郎當ゆ。擧りまれられりのことを。九日ぞうり以前ふ。この山よすゑを。  
阿公ふ後ひゆ。と回答せし。は。為朝ハ松壽をえり。陶按司。この  
のことを認ねりや。と問ふ。松壽はとうちう立よりて。件の死骸  
を熟みて。一切認りゆく。どり。こくふ為朝を一層の疑念がほて。おひ  
定めゆ。舜天丸ハ必ず父の氣乞と精し。つゞ大人いふも。がと  
す。阿公年未くに歸れて。ひとり王子と衛皇子。又近属。長川敗軍の  
落武者と招集ると。も。曝雲これをあわす。あつて。軍兵を  
遣し。捕せん。も。せざる。彼。父の手を借て。王子。阿公を  
殺し。彼亦王子の名を兵士が起し。つゞ父々討と稱。愚民を惑ふ  
謀を経し。あつて。平西朝安桀ある。曝雲が間者。も。松壽の私卒。も。  
詭足し。事。破れ。ふ。及ぶ。も。陶按司。と。が。父。疑せん。あう。と。が。さ  
付く。ば。と。宜へば。為朝。す。ふ。曉り。て。うち。点。舜天丸。推量。その  
越を。ゆ。死骸を。展檢。よ。と。仰され。鶴龜を。松壽と。も。の懷

擇りえり。鱗散の割合あり。加以ての身甲。暎雲。袖襢を著す。されば衆皆駭然として舌を巻た。舜天丸の聰明睿智を感ぜざれり。なうりけ。當下為朝へ東紀堤造。忠義の志を失ひ。あくまわら聚るを賞して。夥計の野伏いくぞ。あれと同の。東紀ホ。荅。今こうゆい。僅ふ五十八人。の餘。圓吉。奥山。うんどう。躲れ者。二百五十人もの。ソレ。王女。これを坐てぬく。按司。うの。官社。ふ。詣て。鷹龜。ホ。櫻會。入招。をして三百人の兵士。と。ゆき。天孫氏の冥助。ナシ。べ。と。祝。天孫。為朝古廟。を。一拜。人誠ゆ。と。ハ。禱。よ。神。の祐。あり。あうれふ。夥血。と。流。して。社頭。と。穢。せ。ゆ。ともか。と。紀平治。鷹龜。ハ。王子。阿公。ホ。死。嚴。を。瘞。て。その汚穢。を。除。た。陶。按司。と。と。ふ。代り。ようど。びの幣。と。進。し。今。や。天。も。明。え。ん。う。り。これ。り。う。も。ふ。鬪。鏤。樹。谷。へ。赴。れ。あ。べ。天。を。や。く。と。明。ふ。け。り。

第六十五回

靈箭を發て舜天丸。暎雲を射る

王女舜天丸をねて。直ふ鬪鏤樹谷へ赴れ。阿公が隱密。各位武侯。きれり。さくと。そ。膽。徐。ゆ。み。階の板を。ゆ。り。立。ま。じ。て。野伏。十人を。ゆ。き。て。社頭の鮮血を。洗。と。流。さ。し。東紀堤造。よ。に。導。は。して。親子三人。り。う。も。ふ。鬪。鏤。樹。谷。へ。赴。れ。あ。べ。天。を。や。く。と。明。ふ。け。り。

賊將を斬て林太夫。兵糧を贈る

為朝親子ハ。鬪鏤樹谷。す。れ。空廬。よ。入。り。ま。べ。且。く。して。紀平治。松寿。鷹龜。も。十人の野伏を。ね。て。ミ。ミ。リ。う。と。も。に。ゆ。り。す。み。タ。此日。み。翁。を。東紀堤造。ホ。を。遣。して。夥計の野伏。ホ。を。招。し。ま。す。四五日。が。や。く。ふ。き。み。城山。へ。あ。り。聚。ひ。う。ば。その志を賞美。して。一肺の肉。一枝の果。も。士卒。ホ。マ。ち。ら。し。ま。べ。その仁心。ふ。感佩。して。銳氣。じ。め。あ。り。や。ま。

とて。かくそ爲朝親子へ紀平治松寿鶴龜木を集合して。その軍略を同  
あす。ハ町礎まづまづらす。つゞ君俄頃よ三百の兵士となまくす。  
矇雲が賊兵より。さく九牛が一毛より。且この山を首里へ近。矇雲  
ちやくあれをあぐん欲先よそるとれへ人を征。後々とれへ人ふ御せ  
らる。思慮ぶ費ひふ遑色。三百餘騎を二隊ふつゝ大里真和志の  
山間より。長く驅てふく進。短兵急よ攻め。備えたる賊の軍兵一  
戦よ滅びし。さく軍配。とそくもやあうせば松壽志ぐく尋す思。そ  
老人の異見。そはじあねふ似れども。賊ハ大勢。それハ小勢。進退嶮岨を  
憑とも。急みハ首里へ攻めり。さく。兩陣相挑むと。そく。行きて  
兵糧よ給へき。矇雲。さく。士卒の餓。あるとあぐん。兵とこうちて。  
背より。龍襲ひ。そんかく。始終の。善策。あくび。只らの山よ毛しき。

首里を攻めとぞ。其勢ひを示す。敵乎こゆくと。困して矢戰。日をおく。  
その隙ふ大將軍ハ百餘人の逞兵を以て。潛ゆる小山越して。浦添の城を拔  
き。矇雲前後よ敵を受て。防ぐ術。そく。然よく。賢もと。廻りする  
ごり。と憚るまくも。まく。爲朝つぐと。うちて。追ひ  
を。易く。退く。難し。舜天丸ハ何と。うよ。と。問え。ハミニ。陶松寿の計策。  
あつれ。べくも。おこられ。この山か。母君を大將に。陶按司を軍師と  
て。兵士二百餘人を残す。爲朝この山よ毛して。日ゆく。首里  
を。ゑ。その隙ふ。父を。舜天丸。紀平治鶴龜木と。百人の逞兵をね  
て。竊ふ東の山路を。徳り。備え。と。討め。浦添の城を。獲。易く。と  
回答す。ハ爲朝この城よ徳して。王女松寿を。大將として。東紀堤造す。



二百餘人を残して、乃龜と御導とし、爲朝父子紀平治ハ浦添の城を取らんとて、百人の兵士みハ弁山嶽の麓へまわりあくとて、その謀を説示て、二人つ起行し。翌日爲朝父子主従へいと寢しく打扮て密やかにぞうち出る。すゝり行ふ陶ね青毒ハ紙を纏て旗とる。竹を剪て矢を矧ぐ。山中要害の地より陣を布て、夜ハ夥しく薪を焼し。爲朝奴等び城山ふ義兵を起して、首里を攻るといひられバ、暎雲との風声とて、大兵よ驚て、棟孫奇律之全廣ホ以下の賊衆を嘗び聚へ去年嶋袋の火攻ふ。爲朝三回六臂ありとも、脱れぬとおり。も。その首級と見えりしかば。ぬく公からしが、彼爲朝ハ死をして、あのびくふ残黨をまた集ら。既に城山ニ屯して、攻めくるとも、いふゆゑ、風声もやかくと拓く。されば、汝あるもすつりん。あうれふ。つやくこころがむれ。ひやる十月。

爲朝夫婦が存亡定りぬ。比より。その往方をあらんとく。云ふ千里眼を睺ど。も。雲霧などの播ふ。すうそ。絶てこれをあくよはす。顧よろ。朝と隠れの術を以て。然まやく、彼代助はうの。アム術。アム折くや。あらん。かくとは、萬りがくれ。歎うり。這奴ふ。勢のちうがれ。間ふ。棟孫全廣も。大軍をおも。駆向ひ短兵急攻にして、鑿みせよ。実言虚云へあらむ。爲朝が子ふ。舜天丸と呼れて。智謀おも。也小冠者ゆ。又八町礁とうひ。礁ふ名を。老黨ありと。そ。輕みな漏く。じそ。と説示せば。両箇の賊将こうう。結果て。千五百騎。小卒。次の日首里を軍旅して。長川をうち渡り。城山へまわる。行ふ。王女松壽ハ聞の声。伏も合せど。やまくに敵をうば。二百餘の兵士ふ下知して。一度ふ數百の大石を。八落とくと投落さと。れば。賊兵矢庭

打殺さうりの二三十人傷けられさるゝのみ。その數とちよだす。八町  
碑よといふ程こそあれ大軍一崩ニ崩れまち。一里ゆきより川退ひて  
兩二日ハ起らざる程のまう。棟孫全廣ハ爲朝の軍配悔りがくちひ  
うれふ舜天丸の智謀。紀平治が碑よ少しあらして。その後をかくしく兵  
をそそめ。山中殊よ鶴あくして敵の多少をえ極めかく。聞の声の  
加勢の兵と乞ふけれども。囃雲坐て安らぬ。やう形りでやうれ。びうち  
馳向ひて踏踏ん。とらぬまきて。すぐて出陣の准儀とぞあらる。かじ  
をす。さす。そとある。きへりぢる。す。と。爲朝舜天丸ハ紀平治鶴龜りうちもよ。夜へゆて昏ハ宿す。す  
ぐぞ。さと。弁嶽の麓まで來りひしづ。主役石ふ尻をうけて跡うりまく  
兵士とすらまく折ら。急地汗馬よ鞭をあげて北より南へ走らる。

りのありけ。舜天丸これを目送りて。彼騎馬ハ山南者へ急と告る使者  
なづべ。引捕へよバ縁由とちるもあつべと宣ふと爲朝ハ坐も  
あへど。志つぶ。おもとぶらげたふ。走ふしむれと迷憾と咲たとまへ。  
紀平治へつと身を記し。某騎とあらうん。といひゆうべ。碑を把く碑  
と駕ばく。五六町も走りよさんとおがした騎馬武者の脊骨を摧ん  
て鞆壺より。仰まみふそ落とす。奇なり妙なりと稱噴。同胞一脊  
を走りゆた。押へて索を被へ。馬ハ頻り小競鳴たまひて。舊来一跨へ走り  
かくねを舜天丸騎で轡をうとせ。その馬とまへ獲まひけ。その財物  
龜ハ半死半生うれ騎馬武者と立ちて立くにしづ。爲朝えがから  
その末歴を責問うふ。彼者苦痛ふ堪ざりし。もくしくへ回答

せざるを。あづく向れて已てとをひそ。あれどもまきと某の浦添の荒登之ふ珠鱗と呼ふ  
りのす。八郎為朝再生して城山へ角斬り。目今合戦の最中也。あらふ  
浦添宣野湾の兩城へ首里の咽喉ひきとりて。をゆく兵士とす。加々く。  
由断なくちうべ。と暎雲法王下知。りきへ浦添の按司伯紀某と使と  
きて。佐敷の按司よ催促。加勢の兵士とゆび聚るのこの外より仔細  
みしといふ。為朝や果て冷咲ひ。それどもすけば這奴よ用ひし。身の暇を  
うじせよ。と宣へば。うけうちれど回答もあへ。そ紀平治が凶うと刃の下ふ  
珠鱗が首へ膝のひくひへ撲地と落軀も共よ倒れ。浩歟よ南吉紅衛  
ら。ホ百人の兵士へ二三人つ走著て。その日の中ふ集令。為朝これふ  
謀を説示。百人が中よ。珠よ珠鱗よ仰るを擇。彼が衣裳は被せて馬  
の。小乗。為朝父子鶴龜同胞。紀平治ホと荒登之ふ打拂て。主役とて  
走り。門を開きて入れまとぬ。城の兵城樓の挾間よくとくよ。とくよ  
より遣したる使者。珠鱗。馬よ乘く月下に立。疑ふべからず。あづられ。一  
遊て城門を推開て諸軍兵を招て入わ。為朝父子ハ既ニ一二の城門  
を越え。城の大将按司伯紀出途へんと見る折。城中俄頃よ騒ぐ。  
佐敷より兵衣誘引来る。使者の珠鱗ハ賊物也。由あく。すみと。呼  
づれば伯紀大いふもどろくて走り入らんとそく處を。為朝刀を引抜まく。  
跳り見て伯紀。首と丁と轡もと。大里の按司源為朝。こくふあり。城の  
賊兵。命惜く。降ふ。あせよ。嘔り。後卒百人。闇の声を仰り。舜天た  
紀平治鶴龜ハ縱横を。見す。ふ砍て廻れ。城の兵士驚て騒ぐ。防て戦ん

春元ラ長月合貴萬下失志之四  
百餘人只管道をひそじつ。その夜亥中の比及よ浦添の城を走る。件の  
假珠鱗。先ふそくみて。城門うち敵き。佐敷。す。加勢の軍兵と誘引す  
ま。門を開きて入れまとぬ。城の兵城樓の挾間よくとくよ。とくよ  
より遣したる使者。珠鱗。馬よ乗く月下に立。疑ふべからず。あづられ。一  
遊て城門を推開て諸軍兵を招て入わ。為朝父子ハ既ニ一二の城門  
を越え。城の大将按司伯紀出途へんと見る折。城中俄頃よ騒ぐ。  
佐敷より兵衣誘引来る。使者の珠鱗ハ賊物也。由あく。すみと。呼  
づれば伯紀大いふもどろくて走り入らんとそく處を。為朝刀を引抜まく。  
跳り見て伯紀。首と丁と轡もと。大里の按司源為朝。こくふあり。城の  
賊兵。命惜く。降ふ。あせよ。嘔り。後卒百人。闇の声を仰り。舜天た  
紀平治鶴龜ハ縱横を。見す。ふ砍て廻れ。城の兵士驚て騒ぐ。防て戦ん

とそろりの一人もなく。半<sup>ハ</sup>後門より脱れたり。また弓を伏<sup>ハ</sup>と脱<sup>ハ</sup>阿容  
阿容と降<sup>カ</sup>まし。かくて為朝父子浦添の城を降<sup>カ</sup>まし。遠近ふせ  
えぞ越<sup>シ</sup>の甲橋<sup>ヲ</sup>。乙抽<sup>ヲ</sup>。丙烈<sup>ヲ</sup>。丁炎春<sup>ヲ</sup>徒三十餘人の獨夫をかく。まく  
かくよければ為朝の属兵百三十餘騎。降<sup>カ</sup>まの兵をあにして。四百餘騎  
とぞせえし。あらわふ城中兵糧よ乏<sup>シ</sup>たり。籠城ムリとみし。り  
宜野湾の賊将撃て出<sup>ハ</sup>。遠く囲<sup>ミ</sup>て日次<sup>シ</sup>。城中戦<sup>シ</sup>して弱<sup>ム</sup>。じ  
騒<sup>ギ</sup>。氣<sup>ミ</sup>りな<sup>カ</sup>。今一兩日と生<sup>バ</sup>。兵糧ものづく<sup>リ</sup>。生<sup>ム</sup>べし。  
宣<sup>ミ</sup>ふを衆皆<sup>シテ</sup>。うるが<sup>シ</sup>や<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>。遠見の兵<sup>ハ</sup>。アゲ<sup>リ</sup>。城樓より走<sup>フ</sup>。り  
宣野湾のこより。軍兵夥<sup>シ</sup>。出<sup>ス</sup>ると告<sup>ヘ</sup>。為朝ハ舜天也紀平治と  
とも小城樓<sup>ヲ</sup>登<sup>フ</sup>。これを見えり。その勢<sup>ハ</sup>。モニ三百人。數十輛  
の戦車をしまして。萬直<sup>ヲ</sup>もせ。一耳<sup>ヲ</sup>ふり。為朝<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>覗<sup>テ</sup>。呵<sup>キ</sup>と  
うち笑<sup>ハ</sup>ひ。あせまる<sup>ハ</sup>敵<sup>ヲ</sup>。あ<sup>ハ</sup>び。佳奇呂麻<sup>ヲ</sup>。リ<sup>ヒ</sup>。林太夫<sup>ヲ</sup>。兵糧<sup>ヲ</sup>贈  
むるなり。それ亦活<sup>ハ</sup>り。といひも果<sup>ハ</sup>り。嶋長林太夫<sup>ハ</sup>。もや濠際  
小走<sup>リ</sup>。名<sup>ハ</sup>これ<sup>ハ</sup>佳奇呂麻<sup>ヲ</sup>。リ<sup>ヒ</sup>。林太夫<sup>ハ</sup>。兵糧<sup>ヲ</sup>贈<sup>ム</sup>。  
を駿齋<sup>ハ</sup>もつる林太夫<sup>ヲ</sup>。大將軍に稟<sup>セ</sup>めと。嘆<sup>ハ</sup>りけり。距<sup>ニ</sup>、  
曩<sup>ニ</sup>王女の佳奇呂麻<sup>ハ</sup>。うせ<sup>ト</sup>あり。仕<sup>ハ</sup>ゆ。あれば林太夫<sup>ヲ</sup>とす  
縁<sup>ハ</sup>。ふく<sup>ハ</sup>故<sup>ジ</sup>て。や<sup>ハ</sup>て城門を開<sup>ハ</sup>し。足<sup>ヲ</sup>迎<sup>ハ</sup>し。嶋民<sup>ヲ</sup>べぐ  
三百餘人。もの<sup>ハ</sup>藤蔓<sup>ヲ</sup>編<sup>ハ</sup>。縫<sup>ハ</sup>木の皮<sup>ヲ</sup>。肱當體當<sup>ハ</sup>。とのとれ  
為朝父子<sup>ハ</sup>城樓<sup>ヲ</sup>下りて。林太夫<sup>ハ</sup>。對面<sup>ハ</sup>。豫の約束<sup>ハ</sup>。錯<sup>ハ</sup>。兵糧運  
送<sup>ハ</sup>。神妙<sup>ハ</sup>。と稱<sup>テ</sup>。叮寧<sup>ハ</sup>。方<sup>ハ</sup>。林太夫<sup>ヲ</sup>。親子<sup>の</sup>  
急<sup>ハ</sup>。を祝<sup>ハ</sup>。某<sup>ハ</sup>この十日<sup>ハ</sup>。前日<sup>ハ</sup>。船<sup>出</sup>して。毎日<sup>ハ</sup>

風のうとうと。やあま人漕よもるとかよりぞ。かくすへ何の日よ泊の西瀬へ寄  
きべた。この焦燥よりけり。一時暴風波荒れて船ともみ反覆く  
と見る折神の祐させりふよりて。更よ順風とひそしきば。土地ふ西瀬へ  
衆若ふれ。あらわす大將軍ハ百騎ふ足くね兵りて。もや浦添の城を攻落  
あしはとせんじぶ。船底よ准体一すみづの松木を組して車とし。やうて兵糧  
と積のせつ。ちと投てひじまろ行ふ。宜野湾の賊將季蛇とやくとが。兵  
糧を奪ふとて二三百の兵をねて城より撃て生ず。血氣ふ勇じ島人ふと  
陣法もあらず。撃術もありゆど。薙刀ふはげして敵と戦ひ。遂に賊將  
季蛇を擊たり。却れハ賊軍忽地敗れて死るの數をあくび。もよひの父を  
得つて敵の遺一とれ弓箭刀槍えりてとあわ。凡此度林太夫は後ひ  
てあるの佳奇呂麻人のをす。由呂鳥奇奴度姑嶋小琉球の鳴人ホ。

大將軍と王女の仁心を景慕。林太夫が催促ふもとづいて、吉原へゆく。  
ひ。と一五一十と演説。摺とりたゞか宜野湾の賊將季蛇が首級をとり  
生て実檢ふ入れ。かく為朝舜天丸大内ふ教び。汝ホが今度の勧化。勇將  
武夫も及ばず。野夫よりも功者ゆゑど。かくもゆゑやしゆきとく。  
あむく賞嘆もひひ。是よりさん暁雲ハ。もぐら城山を攻へとて既ふ  
うち出人とぞれ折り。浦添の城を追落され。賊兵僅ふ首里へ脱へ。ア  
城を奪れ。顛末を告げ。暁雲父もゆゑぞ大内よ驚た。抑彼為朝親  
子。ひうき奇術をひて出没不測の計略とゆゑや。これへ物にして見えざれ  
ことなく。事としてゆふ。今度為朝ホが進退のところの目不  
みえ。この耳ふえ。あらわれど浦添宜野湾ハ首里の咽喉すれ  
敵り。こく取ふとて謀す。ア彼城を奪ひてゆりや。く豫てやう

旨。われハ彼處ふ兵糧の貯まセモ。只月三日あゆき。士卒の月俸。送り遣へ。されば今ハその糧竭る。只彼城をうち廻して日を過す。乃翁智勇あり。とりどり。餓死せ。やへあく。かれが城山の敵へ心腹の病。あく。爲朝ハ浦添の城。不あると疑ひ。してやられ浦添を攻め。さば城山へ。おのづから。浦添とて。おづ縛の越を。株孫全廣。告あし。速孫に首里へ。ゆりふなれ。暎雲。やがて全廣。を。進。と。奇律。之と後陣を。ゆく。首里へ。ゆりふ。浦添へ向づ。といひつうしけり。かくて全廣。ハ。日。ゆく。と。その。牙。ハ中軍。ふ将として。その勢。そぐ。三千餘騎。既。由龍宮城。を。進。ぎ。と。ひ。ひ。名。す。か。と。り。あ。と。た。と。き。護。て。次の。日。龜山の麓。よ。至。り。且く。あ。ふ。毛。一。て。敵の。ゆう。を。撃。向。する。間者。走り。ス。ア。タ。ま。さ。とも。佳奇呂麻。の。鳴長。よ。林太夫。と。り。す。

豫て爲朝。ふと。うを。よ。して。彼北の鳴人。を。か。ら。ひ。兵糧。夥。運。送。て。浦添の城。入。折。うち。宣野湾の大。ね。季。蛇。これを。渡。り。駐。ん。と。して。却。鳴人。よ。警。と。う。と。告。わ。だ。ら。と。又。斥。候。走。り。と。爲。朝。既。よ。兵糧。を。獲。て。勢。ひ。朝。日。の。自。分。と。六。百。餘。騎。を。二。隊。ふ。と。う。ち。ま。く。城。城。を。下。れ。と。あ。其。う。ゆ。こ。ゆ。り。行。よ。忽。地。前。面。ゆ。る。茂。林。の。中。より。一。軍。の。人。馬。馳。出。り。暎。雲。云。ひ。の。報。知。を。す。彼。處。の。敵。軍。と。え。て。は。の。中。大。に。よ。周。章。車。を。捨。て。馬。よ。う。ら。騎。ア。と。く。陣。頭。ふ。馳。出。く。前。面。を。估。と。見。こ。よ。セ。ハ。和。軍。忽。地。左。右。手。こ。う。れ。て。荒。や。う。ふ。禮。よ。る。十四。五。歳。の。美。少。年。真。先。ふ。馬。乗。と。え。磨。毛。把。て。暎。雲。を。さ。」招。て。妖。賊。よ。と。そ。ま。つ。る。ゆ。の。途。た。や。これ。ハ。足。清。和。の。後。胤。法。西。八。郎。源。爲。朝。の。嫡。男。舜。天。丸。し。年。耳。姑。巴。鳴。よ。漂。泊。て。近。属。父。母。ふ。再。會。」更。ふ。こ。の。地。へ。伴。り。れ。され。ば。父。の。命。と。寧。て。將。よ。法。を。誅。戮。

弑逆劫掠の罪と結して嶋袋の死を雪め民の塗炭を救ふと刃と受  
よ。と罵りて士卒ひじく刀を敲ひて岡の声を咄と揚天照皇太神宮  
男山正八幡宮阿蘇明神と号へられ三條の白旗を山風か吹麾に一極將  
虎卒数百人前後左右を陣列し舞天丸の側ゆ白髮の老武者一騎戦  
を横たえ立つゝれぞこの音が聞ハ町礲の紀平治太夫と間移とも  
あれ勇士の相貌縁の威も日本様真ふ一人當千の勇敢をきみあら  
づれり。あれども暎雲が舞天丸の少年を侮りて呵と冷笑ひ  
黄口孺子耳置きに哉言ふ汝が父為朝ふそれと雌雄と争ひる  
そ猛火の色見孤島ふ呻吟と死んでといひなづく。けふ生  
も死もあよびて辛ひうべに又こうりどみふ虎の鬚と折へとく人  
ゑとみかしゆきとまくね。小冠者に先とさせへ生ぐひもなし白徒なり。

誰ある舜天たゞ生拘れと鞍壺敲て鼓圍が暎雲う先登の大将耳目官  
全廣忽地馬を馳よされば紀平治も又馬とすらて追ひゆふと十合  
あまう刃を引て逃走れ。全廣の馬よ拍れ逃にじと追かくる間をうりて  
紀平治の刃を反りて丁と撃。砾とともに全廣の馬よく撞と粉び墮て血  
を吐くと駿一賊将奇律之これをとて渠全廣と助よと叫びつ。士卒ふ  
先づち馳出一が又紀平治が狙撃。砾母眉間を打碎且馬より真逆さぬ  
ふ被び落れば南吉紅衛林大夫木群ふと落うかりて全廣奇律之  
が首級を獲る。されば紀平治が手練の砾ふ暎雲う憑まく。賊将  
忽地足を乱して一聲よ崩れ駆げ。暎雲よとあくら慌て頻々咒文を  
唱ひ。幻術破れて驗る。これそものうか。とこれあらゆる。壯然とし

そる所をもとび。浩劫の暁雲が後陣をもひきられて。敵まく背よりす。  
尋ねると叫ぶ。や。聞の声。夥しく。長川の賊軍敗きて。賊の大將棟孫を  
ば。王女も。うち撃とりて。も。龍宮城をり攻もし。暁賊が迹を追て。  
推よじまゆとあい。ざめや。東風平の按司陶松壽。こゝにあり。名告かく。  
潮の涌ぐ。おどり。攻うちれ。暁雲前後よ敵を受て。御禁ぐにそぐ。新すく  
自方をつめかく。且戦ひ。且走れ。廟岡のほんどうよ。亦一軍の人馬  
駆出で。遙ゆ。途を遡り。苗八郎為朝。くと高れ。や。暁賊逃とて脱べる。  
と。まうけ。身雷の。とく。暁雲進退既よ空り。是非多く。壁破り。走  
脱んと。それ。爲朝の陣中より。鶴龜同胞。馬と並べて逆まうし。甲櫓。乙袖。  
内烈。丁炎春。又左右より。挾み。脱はし。と。攻撃。と。火の然。水の流。よ。傾  
て。又。背より。王女の大軍追蒐。あり。箭を飛。を。兩の如。一。至らく

賊兵。或ひ撃れ。或ひ驅隔られ。暁雲只一騎。よ。りしづ。爲朝遙よ。間。て。  
擇。等。小村。て。篠さん。そ。二所藤の弓の握。太。に。鶯の羽の征。天うち  
刺。見。此。の上。引。て。あ。と。堅。り。て。丁。と。射。る。その箭。あ。や。も。と。底。  
暁雲。胸板。せ。り。て。礮。と。射。ふ。鎧。碎。け。て。飛。散。り。爲。朝。ハ。一。の。箭。射。う。  
缺。す。を。ゆ。く。射。て。馬。を。彼。此。よ。乗。廻。矢。壺。を。踏。を。教。回。ら。ふ。キ。ふ。射  
う。人。も。箭。を。ひ。く。て。敵。よ。た。に。上。差。の。征。矢。二。十。四。條。を。も。ひ。ご。づ。  
や。射。捨。う。べ。弓。投。捨。く。嘆。息。し。これ。總角。の。も。じ。よ。り。弓。箭。伏。ぎ。て。名  
を。も。く。れ。實。よ。れ。甲。が。鳥。く。とも。弓。箭。面。も。う。き。い。  
て。と。も。され。鬼。鳴。み。千。弓。の。巖。を。射。て。碎。る。大。嶋。や。数。百。騎。衆。る。  
兵。船。を。射。て。沈。め。う。緩。暁雲。五。體。鐵。石。を。り。て。造。る。と。も。弓。箭。の。立。する  
こ。と。や。あ。射。手。捕。ふ。せ。ん。と。焦。燥。て。馬。を。馳。よ。せ。ん。と。ま。へ。跨。轡。へ。だ。く。

その轡を率ひて。あらゆくした。ひに。舉動うな。鶴を割ふ。牛刀ばりもふ  
べうべ。老賊不測の妖術あらん。大将ちんまを。ごとくして。り。不虞の  
ことあらぶ。後悔其怨よたらざ。と理をほじて。練しう。為朝を齒を  
切る。拳を握て。そぞし。鶴龜ハ為朝の。と。と。より。あらや。と  
諸軍を激。一。暮直小。亦。暎雲。ふ。軒。で。か。れ。ば。暎雲。東。敵。手。を。そ。  
ま。六。尺。ゆ。ま。り。の。金。撮。棒。を。水。車。の。あ。と。く。陣。す。て。よ。せ。あ。ふ。敵。を。打  
は。く。ふ。或。ハ。目。子。を。出。て。首。軀。へ。滅。ひ。新。り。の。あり。或。ハ。骨。碎。け。脳。黄。出。る  
り。の。ゆ。り。そ。矢。庭。よ。射。殺。さ。く。兵。士。數。十。人。そ。の。疾。と。電。光。の。如。く。一。采  
の。鳥。暎。雲。暎。雲。が。頂。の。上。ふ。掩。し。て。ち。り。一。ち。の。次。女。を。隠。し。前。ふ。ある。う。と。す。れ。  
忽。然。と。して。後。ふ。あり。越。来。の。甲。櫛。乙。抽。う。徒。圓。場。の。東。紀。松。川。の。南。吉  
ヶ。隊。か。の。く。添。疲。負。さ。う。ん。か。あ。れ。ど。も。鶴。龜。ハ。一。步。も。退。く。を。圓。の。内

あれ。君の仇。家の為。あれ。父。母の仇。こ。ふ。怨。を。雪。や。ど。り。づ。れ。の。時。を。期。  
ふ。と。と。て。喧。叫。で。戦。へ。王。女。松。寿。又。後。方。あ。り。よ。せ。あ。い。し。奮。射。も。突。戰。射。伏  
拂。ふ。身。方。危。く。こ。と。じ。う。ふ。為。朝。へ。堪。う。みて。み。う。ら。勝。負。が。決。せ。ん。そ。馬  
の。足。搔。そ。と。と。え。き。ふ。左。手。の。岡。を。繞。て。出。る。舜。天。丸。の。一。陣。走。あ。い。  
さ。き。ふ。す。す。ひ。り。の。八。町。礎。の。紀。平。治。あ。り。王。女。松。寿。り。う。と。も。に。二。人の。孫  
が。暎。雲。に。懲。惱。さ。く。と。く。と。て。些。も。擬。議。せ。ど。三。尺。の。太。刀。抜。う。ざ。四。騎  
が。間。へ。走。ひ。て。刀。尖。よ。り。火。を。出。す。命。う。だ。と。戦。よ。う。す。の。隙。よ。為。朝。へ  
ま。ま。る。あ。わ。持。と。び。び。え。る。鶴。の。丸。の。宝。劍。を。う。ら。振。て。間。ち。く。走。よ。う。人。ぐ。  
宝。劍。の。威。徳。よ。も。それ。そ。ん。暎。雲。猛。よ。風。を。起。雲。吹。び。空中。へ。登。す。ん  
と。そ。れ。处。を。舜。天。丸。へ。姑。巴。嶋。を。三。所。の。神。や。裔。紀。己。桃。の。箭。よ。義。家。と

藏。黄金牌をとりもえつ。弓と滿月のとく。書固めて。且く祈念。之  
ば。忽然として白鶴兩翼。旗竿の上ふ翔と。何處かが。空中ふ。驚  
き。驚き。  
の鳴声。笑えしき。念願成就。と。のみりく。弦音高く。兵と射る。その箭流  
る。星のとく。暎雲が吹碎て。兔が。さきと射し。まくべ。あに。堪  
せし。馬上より。仰さる。轡と鹽。為朝乃。うと馬より。走り。彼宝劍が。そのとく  
走。九刀刺徹し。怯ふと。とを押伏せ。首と。帶と。接濟。まくべ。天俄頃。ふ  
結。隠。大兩盆を覆。と。が。とく。四面野子王の闇。と。が。とく。あ。し。善西。り  
つる。ざ。う。く。ま。

第六十六回

龍宮城。や三賢志を速  
夫婦塚。よ兩兒誕生を  
この日舜天丸り。おりの旨ありと。而具を。夥齋。と。ふ。驟。よ。兩降

そぐ。こし。人。ども。濡。う。り。の。な。う。り。け。と。あ。と。ひ。為。朝。ハ。舜。天。を。お。對。く。  
も。身。い。ゆ。し。て。と。ふ。兩。降。ふ。ん。と。く。死。走。り。て。兩。具。を。准。候。一。た。る。や。と。同。り。へ。が。  
舜。天。丸。大。軍。の。後。凶。年。め。り。大。殺。の。後。風。雨。あ。り。あ。れ。古。今。の。恒。言。く。  
ひ。じ。周。の。武。王。紂。を。駆。す。と。れ。孟。津。を。と。う。り。と。へ。白。魚。の。瑞。ゆ。り。紂。自  
殺。そ。う。れ。及。び。て。大。兩。盆。を。覆。と。う。如。一。足。化。也。天。聖。王。の。乃。ふ。祥。瑞。を  
示。し。又。兩。を。く。じ。て。殺。戮。の。餘。氣。が。消。り。な。く。止。ぎ。今。や。と。が。父。義。兵。を  
り。て。暎。雲。を。討。ま。し。白。鶴。旗。の。上。ふ。と。す。り。鶴。空。中。ふ。鳴。り。又。大。兩。降  
そ。ぞ。れて。殺。戮。の。餘。氣。が。淨。し。舜。天。丸。ハ。と。す。の。軍。ふ。か。と。う。に。暎。雲。と。響  
う。ぐ。れ。と。く。は。あ。方。故。ふ。兩。具。を。齊。し。と。回。答。ま。し。ば。為。朝。王。す。り。へ。ま。し。  
士。卒。これ。を。す。く。り。の。ち。の。才。人。稱。噴。せ。ざ。れ。ハ。と。う。り。く。且。く。し。と。雨。歇。  
西。云。舜。み。う。れ。ば。主。役。う。ち。娶。じ。て。暎。雲。が。死。體。を。と。す。ふ。あ。り。う。の。え。ま



人倫ひとりんよりあくべ。その長さか五六丈可よしれ。丸龍まるりゆうみどりありける。琉球二顆の珠たまをば腮ほほの下したに差さす。珠たまの傷口きずより生なて地上じじやうより、鱗うろこと半輪はんりゆうの月つきをうち累たまごすれどく。凡すべハ大船おほふねの錨碇見みのて。眼まなこハ百煉ひゃくれんの境さかいのあく。ほの血ちと裝つる盆ぼんのて。全體ぜんたい堅かたして鐵てつの柱しゆの如ごと。裏うら皆みなそれをえ。駭おどろ然ぜんと驚おどろけ怪あや々あや暗くろい睛まなこをよし舌したを吐ぬて怕おそりの又多多く。當とう下げ松寿まつじゅへとミ出でて。為朝親子めいしゆしゆ不畜ふしょくす。大古天孫氏だいこてんそしゆに。この國くにが王おうとなりしと。毒惡どくおの巨丸ごくわんより。變化通力彊じょうみられば。民みんこれが乃おの小害こがいせしと。又うて國くにの名なを龍丸りゆうまいと。下しも天孫氏件てんそしそんの丸まるを殷おきて。民みんの名なを害がいせしと。且またその珠たまと摸もて。これを琉球りゅうきゅうと名づけ。後遂のち國くにの名なとせり。されば珠たまを摸もる處ところが王城おうじやと唱とな。丸まるの骨ほねを埋うめると。舊丸山きゅうまるやまとりふ。高嶺たかね是なる。天孫氏嘗なま言ことを。丸まるは國くにの大久敷おほくしき寝ねなり。子孫こしゆり一奇いちきと好すむのゆりて。彼かれ丸墳まるづるを發はく。丑うし年德ねんとくより衰こわく。又また國家こかを失うしなぐ。よもとくこれ小琉球りゅうきゅうの北濱きたはまある。赤瀬あかせ碑石ひせきを立たて。後あとは困難なんりありといふとも。この碑石ひせきを祈きり。禍わざを脱ぬぐ。悲かなしき不德ふとくの君きみ國くにを失うしなぐ。及いたびて東方とうが日輪ひのあり。朝あさみ出でて。今いま國くにの名なを照あさん。努力めり情じやうめと宣せんせよ。世よくの口碑ひを傳つへ。もう。もう尚寧じょうねい王おう奇きを好すむのゆり。丸墳まるづるを發はく。赤瀬あかせの碑石ひせきを招むかれて。これが乃おの崩くずれ。王おうせうぶら赤瀬あかせの碑石ひせきを發はく。禍獸わざくじゆ土中どちゆを滅めす。と。久ひども。矇雲もくう中山ちゆうざんよ跋扈ばくこして。遂つい乎南北省ほんぽくを呑のむ。かきを。矇雲もくう。往古天孫氏あむかを殺ころす。丸まるす。疑うなづく。怨うらがい。死死。枯骨くこつ十千載じっせんざいの後あと。甦よ生うして。舊きゅう怨うらがを報むくる。且あわせ天孫氏てんそしゆの遠とお言ことを。也よひあく。東方とうがを。日輪ひの。朝あさみ出でて。今いま國くにの名なを照あさんと。

今日の子こなう。そひらうあいぞ。大東の白王孫日ひの神の後裔なり。朝みまるてしく國くにのあふ照ての一句。小則アト為朝あの二字。こりれり。あれバ天孫氏アキハタスの子孫アキハタス。代アシテ。この國くにを治アシテ。君ミコトと大將軍父アキハタス子アキハタス。と信アシテ。古アラヘを推アシテ。今アラヘ既アリ。二顆の珠アリを拾アヒラフ。爲朝アシテ進アシテらアシテ。爲朝アシテ。受アヒラフ。世アリの浮説アリ。信アシテ。陶アシテ按司アシテ。もアシテ。その珠アリ預アシテ。爲朝アシテ。次アリ。勸アシテ。モ。手アリ。手アリ。採アシテ。火アリ。力アリ。考アシテ。と。宣アシテ。い。勸アシテ。ど。も。手アリ。手アリ。採アシテ。火アリ。力アリ。も。よ。づ。戰袍アシテの袖アリ。逃離アシテ。珠アリ。押裹アシテ。す。ぐ。て。鑑アシテの上アリ。小負アリ。ね。か。く。そ。爲朝アシテ。樹アリ。伐アシテ。薪アリ。と。み。虹アリ。の。龜アリ。的アリ。燒アシテ。失アリ。又アリ。猛火アリ。中アリ。火アリ。み。ぐ。ら。その皮アリ。毛アリ。燒アシテ。ざ。れ。ば。せん。そ。ぐ。の。ま。小。蠶アリ。叢アリ。中アリ。引。捨アシテ。さ。せ。ま。手アリ。奇アリ。ゆ。う。虹アリ。龜アリ。旭アリ。ふ。ひ。ふ。霜アリ。の。ご。く。忽地アリ。小。腐アリ。爛アリ。骨アリ。も。と。ど。あ。そ。悉。水。と。な。り。て。失。一。か。ぶ。衆。皆。再。び。驚アリ。怪アリ。そ。の。故。と。ある。の。也。

舜天丸アリ。つ。く。と。え。を。み。じ。て。こ。の。ゆ。く。怪。い。ゆ。き。づ。く。の。草。蛇。毒。火。解。そ。の。功。め。れ。ば。虹。の。龜。の。解。く。れ。な。く。ド。この。國。少。へ。夥。有。放。草。の。名。を。ば。何。と。い。ゆ。く。ん。と。同。き。ふ。年。老。と。れ。兵。士。も。経。て。縛。り。り。く。ど。と。い。ゆ。く。王。女。へ。且。く。尋。思。一。そ。舜。天。丸。の。鑒。定。そ。の。よ。し。あり。う。が。良。人。の。武。德。天。地。火。動。し。ま。べ。祥。陽。も。又。多。く。され。ば。こ。の。草。生。生。て。ま。ぐ。蛇。毒。を。治。され。る。や。ゆ。ん。ま。ぐ。試。う。小。曇。雲。ふ。傷。け。られ。れ。東。紀。南。吉。甲。櫛。乙。袖。ホ。ガ。瘡。口。へ。著。に。て。そ。よ。と。宣。ひ。て。そ。の。草。と。摘。採。し。て。瘡。負。く。る。り。の。ふ。賜。る。ふ。立。地。よ。其。瘡。愈。て。若。痛。拭。ひ。去。う。が。如。く。な。れ。ば。皆。飲。び。て。ま。う。し。ク。お。ひ。ゆ。へ。より。弓。の。國。少。蛇。類。七。種。有。り。蝮。蝎。の。殊。少。大。有。り。の。を。羽。夫。と。唱。ふ。頭。ハ。圓。ち。く。尾。ハ。短。し。こ。の。毒。蛇。ふ。蟄。く。り。の。も。わ。く。活。と。よ。り。て。土。俗。の。誓。言。ふ。羽。夫。よ。蟄。あ。法。も。あ。く。ん。と。り。く。す。あ。う。れ。ふ。今。ゆ。く。り。や。か。る。灵。草。

ハア草の  
事羽羽考  
の説ある  
がて作者  
の考義

の生也。なごむ。蛇毒を治せんる。えひ是大將軍の親子の仁徳より  
てなり。いと愛し。と祝。まうせぐ。為朝。よび。ふうち笑え。世の  
常言。南中殊。恐べ。れの甚へ。蛇と。今この草のする  
處。づ。徳の致。あく。ば。欲。下へ。國の事。抑。毒蛇と。羽夫と唱る  
は。何。根。く。も。と。問。ま。ば。松寿荅。そ。ぬ。反鳶の轉語。り。といふ説  
あれど。附會の言。羽羽。ハ町。この。圍の古言。も。と。回。答。う。ぶ。寐天丸  
小膝。を。破。と。拍。これ。も。と。も。あ。く。も。と。こと。あり。と。日。の。本。す。絹。の。最。上  
う。を。羽。二。重。といふ。言。羽。拂。きて。蛇。皮。ふ。を。も。と。て。の。名。う。ぐ。白柿  
も。又。蛇。毒。を。解。そ。の。功。あり。又。蛇。脱。の。薪。ふ。著。く。物。と。者。つ。れ。へ。  
鍋。あれ。釜。も。られ。波。墨。と。忽。地。小。破。く。り。の。し。その。と。れ。も。や。芊。殻。火  
焼。く。べ。破。れ。鍋。因。て。舊。の。と。く。う。る。も。よく。知。る。よ。と。宣。へ。ば。え。お。そ。

とぞ聞ちき。されど。かく。まゝ聞け。識を感佩。是より毎戸一件の草を植ざるのみ。その名は  
羽羽草。よど。よど。とある。まる役が為朝親子ハ凱歌三度揚げて。虫の頭を。百  
餘人。ふねに。かきまへ。すそ龍宮城。ふ入りまへ。中山南北の三者。三十六の属官。ふ  
ひづれまで。風を脇で悉く降參。さそ虫の頭。少く妖賊。暎雲と榜ふ。讃て。  
故會門の外画。みをえにしまふ。覗りの日。くに堵の。と。その後羽羽草の中  
あ無むじ。しりん。が件の頭を。地。み銷練。うそぞ不思議。する。かく。賊乱全  
治しづ。有一日。為朝。ハ松壽。紀平治。鶴龜林太夫。ホ。と。ごて。有功の輩が  
集會。て。富ひ。尚寧王。薩弱也。と。逆臣。妖賊。ホ。が。る。ふ。圍城。侵ひ  
まやく。今幸ふ。王女あり。うが。大日本。の古實。ふ。よ。ると。これ。を。女子。と  
い。ども。民の父母。うるべ。速ふ。佐。ふ。即く。圍ふ。王。ある。と。と。おも。と。さざや。と  
宣へば。王女。これを。まも。ゆく。を。額。よ。行。て。席。を。避。ふ。と。ひも。かげね。と。を。

笑えまふりのうね。こゝらを蕉田の王女ふ侍へば、自縊姫の貞魂がこの身に  
憑るはし人もありれどよ。や形貌ハ王女なりと。丈夫ふ踰く王位。即ち  
天地反覆そがふ似たり。アリ強て勸やまう。面より自殺。侍へんとありし  
定りて推辞。衆皆嘆ひゆう。王女の謙遜道理。稱りせたまふ。故  
大將軍。徳高く。且先王の女婿。あせが。もく王位。即たまし。  
臣ホが心を安らじ。とつも果が。安て高座。推登せんとあらじ。が  
為朝。袖拂て頭をうち。掉各位の勧。アハ。が本まの情原。あらじ。  
されハ日本の浪人。じらう。この國へ推渡て。困難を救ひ。榮利謀る意  
也。君父の仇。平清盛を殺すんと。木原山の宿りを出。水行。京師へ  
赴く折。心地風波。船を壊されて。士卒悉入水。死。為朝ひとくちの  
命。おもふ。わざと。國へ漂泊して。寧王女の舊恩。報へとおりふぞうりに。嫌忌の中。年月を

舜天丸の  
名の事典  
二書より  
ところの  
中山世譜  
中本づ

いふもそく先進とぞれども父子相讓て往ひき氣をよぶれば紀平治班を  
そみ出即位のとく人力とりて定めざし。あすれども大殿日本へかへて  
まわる。あの岡崎とび安らじ。あそし。摂政して岡中とおもひまわる。王位  
おのづくじ定めともゆうん候。あづ大功あるりのふ勸賞行ふ。うりや。  
これらが松壽も亦班をすくに生。大將軍夫婦父子。あぐく謙遜辭讓」  
あひて。よそえて王位よ即ちうる。大將既つかの如し。士卒のうやう恩賞を  
臨ん。やひもかけねる。とりへば鷹龜ある。又この浅ふきごひて恩賞の  
沙汰をうづめまうせ。はるか勤つゞと左右をみて。功あると賞し罪ある  
を計ざりせば。岡ハ一チ日も静うじ。紀平治がしふぶつむ意と稱す。と  
宣ひて。すぐて松壽を越えの按司として。兼て東風平と領しめ鶴を  
中城の按司として。毛岡井が本領。ふ郷村數箇をはしかへて。毛岡鶴  
と名告じ。龜を外祖紀平治よ養い。八町龜と名告らして龍宮城  
の苗守と。紀平治を親雲上として。舜天丸の傳とし。林太夫みく佳奇呂麻  
をあひて。兼て小琉球より以南。姑宋嶋ふ至るまで。十六嶋を管領に。  
東紀南吉堤造紅衛甲櫓乙袖丙烈丁炎春少を筑登之と。郷村  
一箇所づと。こゝらあく。王女ヒ中城の世子殿ふをらして鶴次傳とし。  
為朝ハ大里へ退て。舊のまづく按司と稱す。舜天丸を浦添の按司と  
て。源尊す敦と名告じ。すがれはしを仰ぎ。ふ松壽を紀平治鷹龜を。  
為朝父子の官職のひと卑たをひくとして。せめて。岡男ども。法司とも  
称すに。まくじと。勸とども。これまく後ひあり。それば。衆皆力むよどじ  
そ。因心賞を拜謝。ものく為朝親子と居住の地へ送り。あくして。また  
おづ采地へ赴んと。そとお役ふ林をまも身の暇をあつて。佳奇呂麻へ

琉球の  
林太夫  
天満宮の  
擁護み  
より水  
厄を脱き  
と昇  
ぐくも  
想ま  
か云云の  
神詠あ  
琉史余論

ゆるとして為朝ふ稟々。此度某嶋人也ふおて泊の西濱へとて漕ぎ  
せ一兵糧船。風波のあむ波上人とあくられ折淮とあくは梅の花と酸羽と  
あて衣冠正と貴人う船の袖前へ立あくられもとええて風と立地。且  
軟だ船とも云ふ悪ひのをゆく。これらも亦去年の修驗者みひとしく。  
瀬岐院のあん使もやありさん。いと奇しき事す。有がて擁護なり。と物  
かれば為朝改を傾け。あく太宰府がれ天満宮の水厄風難を救つ  
縮とりける。有一タの夢ふ。菅家枕上か立あふうれて。

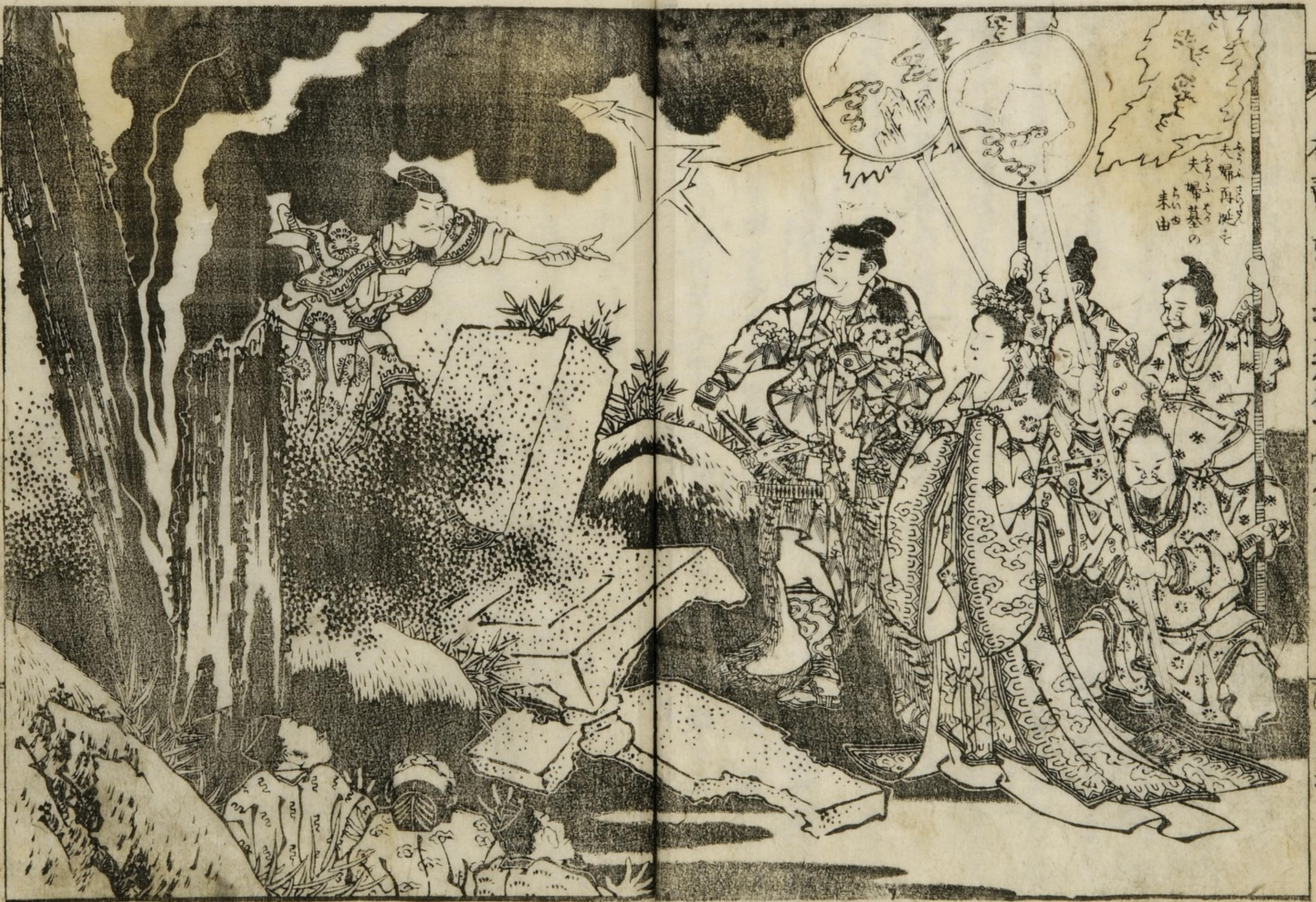
づくてもあざふあづべこれとあれとあつての外すづねそ  
と吟じりとて夢ひ是を。余りようの来。され梅花を云れば  
かずくじ拜せどといふこと。されあめ意報なき。天滿大自在天神

巻ノフ下  
井南嶋志  
ふ本ほく  
一本多崎  
をえ米村  
お修もと  
非<sup>琉</sup>記  
あ<sup>琉</sup>記  
あ<sup>琉</sup>封王  
第十代尚  
元王の時  
みよと後  
史餘論木  
みよと由  
由

と斎祀をす。寛平延喜のあん時小重用せし。贈正一位太政大臣。菅原  
朝臣道真公の神灵也と信じ。この神人間ふかまそりし日。朝廷ふ  
つ入て松を。風流鹽梅の臣うた。文筆の才古今み傳ゆくとあせ一が。  
左大臣時平公は媚れ罪をくして太宰權帥小左近せられす。ひととあり。  
首尾ハ箇様。ともちもなし。説あじしまへば。林太夫ハ感涙を禁らわべ  
ゆき信心を發す。これよりして毎旦は彼崇德院の瀬千鳥の以制表と岳長家  
の樹ふゆぶあれとあれの偈歌を吟ほり拜しける。一年異朝へ使  
ひとて渡唐の船漳州を。梅花海を反覆す。船中の人。大うきの漏れ死  
たりけれど。林太夫の梅の技を携著て流れつ。遂に他舟は助け棄られ  
て。故國へゆる。かく再度の冥助を感佩して姑采嶋の神社を  
建立。天満宮をあり。されば琉球國の天満宮はありませぬことを。

林太夫よりとじよまれといふ。琉球記不題為朝ハ大里の城へ入りましも左  
ふ右ふるやまくで。を多くも秋の比ふりしう。國中とうら巡りて民の苦勞  
を問ひ農を勧め業を激さんとて。従者をぶひと妻一。大里の城と出てすゞ  
天孫廟へ詣て幣帛をとてある。越て中城へ赴た。王女が体ひ夫婦  
りうともふ廟岡へ詣て先王尚寧の廟を拜す。又廉夫人の薨と年をひ。  
姑場よりて町寧ふこれをすつと。途の序なれば越来山なる真鶴が。  
率都婆塚へ香華をま向んと。件の山へ攀むてありふ。松壽を城を  
生む。道次ふ迎えとす。恩澤亡妻が枯骨みまへ暨一まふと。有がくた  
まやふ忝し。と拜謝して。あら先ふたもと。御導をそひにけむ。かく  
主従山を登りゆくて數十町にして。雷雨驟よ降そぞだか。ありたる松の  
下ふ立在て。赤い脣を俟まへ。忽地霹靂一声震ふ。はとり遠  
かく落すとあやしくて。すぐて雨歇雲晴もけれど主従も樹の下伏  
りを。そとそつと。雷ハ云の延へ落すりけん。墳墓へ壊れしと  
て。土中に赤子の啼声と。事の為体ひと怪一かりしう。為朝がて。土火  
かれ拂ひてえまふ。生まれてしまふ。百日とて狂き赤子のもうも籽生  
れ。一人ハ男子。一人ハ女子す。ありこれ。そのとれ王女の良人とともに。  
袖わきけて抱れど。松寿をえりて室をまう。もれは足を踏ぐ。慙愧の  
産とこうして陶樓司の子ひれみ隠ひ。彼眞鶴は足下の妻  
もなりやれど。只一日もひとりふ住む。その外國難ふ死一とくと。  
もと遠憾うと。されば年を経て。その末に率都婆は馳て東  
方良人を脅眉され實は無理外の奇縁なれば。その亂を感ずて。あく産  
と。亦まじと誣る。鶴は五百年にして遊化せと雌雄相見て孕むりある。

夫婦再誕を  
夫婦墓の  
未由



それも口氣を感じて孕てまわはるや。とおへは為朝と赤子の面  
紙を是彼とらう觀り。今この男女の仔生てふる。高間太郎と磯萩ふ  
く肖す。件の夫婦の忠義の志あじとつゝ。不幸ゆく彼底に  
沈ひのうち。魂魄急地鰐魚ふ馮<sup>アシ</sup>て舜天丸が死を救ひ一のなり。是  
彼りて奇とつぐ。よりておの男兒<sup>ヒノコ</sup>高滿と名づけ。女子<sup>ヒメ</sup>小萩、  
と名はれ。寧都婆<sup>ニダマ</sup>墳と更て夫婦墳と唱へし。よく慈愛て養育す。  
と宣へ。松壽もあがく嗟嘆<sup>カクタス</sup>。某この山ふ世を潛<sup>カキ</sup>。折<sup>カツ</sup>彼千歳ハ  
有<sup>アリ</sup>。四月あやなり<sup>アヤナリ</sup>。されど千歳ハ真體<sup>マジ</sup>魂鬼あり。三疊<sup>ミツタタ</sup>  
て。有身<sup>アヒム</sup>あらわす。あれ丈人公の感ひやうん。とおりし捨てぬじ  
う。土中にその子を産<sup>アラシ</sup>。奇怪めへ過<sup>アラシ</sup>。凡天地の大なる變化  
かんちあざぎ。本來彊<sup>アラシ</sup>なれば。その事<sup>アリ</sup>。とつぐ。某いまと一子<sup>アリ</sup>。舉<sup>アガム</sup>ハ町蝶<sup>マチテフ</sup>  
も子<sup>アヒム</sup>なれど。仰おあらて外孫<sup>アラシ</sup>龜<sup>カメ</sup>を養<sup>アガム</sup>。現<sup>アリ</sup>後<sup>アラシ</sup>に  
不孝<sup>アヒム</sup>。といとむ憂くらひよ。不思議<sup>アラシ</sup>。仔生を举<sup>アガム</sup>。と。欵<sup>アラシ</sup>び言語  
ふ盡<sup>アラシ</sup>。と信<sup>アラシ</sup>。回<sup>アラシ</sup>。後者<sup>アラシ</sup>て墓<sup>アラシ</sup>の土石<sup>アラシ</sup>。舊<sup>アラシ</sup>の<sup>アラシ</sup>。ふ荒<sup>アラシ</sup>  
されば。鎮西<sup>アラシ</sup>為朝<sup>アラシ</sup>と鑿<sup>アラシ</sup>打<sup>アラシ</sup>。鏟<sup>アラシ</sup>一<sup>アラシ</sup>を拾<sup>アラシ</sup>ひ。松壽も毎<sup>アラシ</sup>も足  
を<sup>アラシ</sup>。せふり雷斧<sup>アラシ</sup>などふやあらん。八郎按<sup>アラシ</sup>司のあん名<sup>アラシ</sup>をもるせ<sup>アラシ</sup>。  
そろひにしとく。やうて為朝<sup>アラシ</sup>みやかく。されば。為朝<sup>アラシ</sup>つとてとて眉<sup>アラシ</sup>  
を頻<sup>アラシ</sup>めし。これ肥刑<sup>アラシ</sup>は流浪<sup>アラシ</sup>。木綿山<sup>アラシ</sup>小狩<sup>アラシ</sup>して。雷獸<sup>アラシ</sup>伏<sup>アラシ</sup>  
くる。とあり。そのとて前<sup>アラシ</sup>ごとくへあられども。遂<sup>アラシ</sup>み雷獸<sup>アラシ</sup>の往方<sup>アラシ</sup>をもだ。  
原来<sup>アラシ</sup>。真鶴<sup>アラシ</sup>が墳墓<sup>アラシ</sup>と崩<sup>アラシ</sup>。と。その子を出<sup>アラシ</sup>せ。雷公<sup>アラシ</sup>。しに<sup>アラシ</sup>。征矢<sup>アラシ</sup>  
を負<sup>アラシ</sup>。木綿山<sup>アラシ</sup>の獸<sup>アラシ</sup>。乳母子須藤<sup>アラシ</sup>を震<sup>アラシ</sup>れ。と。為朝<sup>アラシ</sup>が恨<sup>アラシ</sup>と解<sup>アラシ</sup>  
を。このおの子を授<sup>アラシ</sup>する。人物の因果<sup>アラシ</sup>へゆき。ある。ありとある世の

物語。書も畠なり。今更ふとひ出でる須巻がて。山雄野風がこと  
ありとて顔未と告ぐ人バ。衆皆耳び側そけり。かくて為朝夫婦ハ越  
の城入りて兩三日通畠。亦復二者を巡り果て。小琉球より赴て赤瀬  
の碑を拜一きよ。為朝彼此伏え入りて。うの處の風景。よく伊豆の  
大嶋み似く。と嘆ひ。かゞ。小琉球を更けて。今へきて大嶋と唱へ  
亦彼赤瀬の碑ハ禍獸を薦められべど。その一名を福冢と呼ぶと  
名。信錄を按。大嶋ハ中山より水行三日ふ達る。しみづら  
小琉球と稱をといふ。即墨なり。さう行ふ陶松壽も。おりしもかけを  
両見せ。かく教ふことかだり。乳母にて養育を教ふ。いと健やく  
生肩。後世楊文鳳。夫婦墳を吊詩す。卷端画上。のせ。

椿說弓張月殘編卷之四畢

卷之四

拾遺集